

有合せものでの饗應

杉の家風とでも云ふべき客のあしらい方につき、千代子刀自が後年次のやうに語つてゐられる。

松陰は顔には痘痕あり、世辭はつとめて用ひず、一見甚だ無愛想なる如く思はれたれども、一度二度と話し合ふ者は、長幼の別なく松陰を慕ひ懐かざるはなかりき。松陰も相手に應じて談話を試みたり。松陰は又好んで客を遇せり。御飯時には必ず御飯を出し、客をして空腹を忍んで談話をつゞけしむるが如き事は決してなさざりき。珍味佳肴なしとて、御飯時に御飯を進むるを差しひかゆる如きことは無かりしなり。有合せ物のみにて出し、快よく客と共に箸持つことを樂めり。たま／＼客を請することあるも、珍味を少しく用意するよりも、粗末なるものにては澤山を出すことを好めり。また、渡邊高藏翁は次のやうに云つてゐられる。

松陰先生は門下生を集めて屢々會食をされた。その時は肩の凝らない人情話があつたが、情味たつぷりな、人間と生まれてはかくあるべしと思はさせられる、人倫道德にふれ

てゐる平易な實踐道德論であつた。そして先生はお話が上手であつたから、門生達の腹の底までしみ込むやうによく分つた。

これが杉の家風であり、瀧子の主義であつた。それであるから瀧子は先生の同志でも村塾を訪ねて來ると、先づその遠來を謝して喜び迎へ、食事の如きは城下の片田舎のことであるから、これといふものはないにしても、まづいものでも盛り澤山にして心から進め、田舎酒の一本でも温めて出すと云つた真心こめての歡待であつたから、外來者は何れも好感をもつて喜び歸つたものである。

かうした遠來の珍客でなくとも、塾への通學生の中には晝の辨當に梅干や握り飯や焼き餅などを竹の皮に包んで持つて來るものもあつた。瀧子はこれ等の塾生達には自宅から澤庵漬やお煮しめなどを持つて來て與へたり、或は夕方にもなれば風呂を焚いて門生達をもてなしたのであつた。

殊に松陰先生は時々塾生達を引きつれて、兵學教練の野外實演に出かけられることが度度であつた。かういふ時には必ず瀧子は風呂を沸して塾生達の歸りを待ち設けてゐたのである。このお風呂のもてなしは塾生達の最も喜び好んだものであつて、今に語り傳へられてゐ

る、瀧子禮讃談の一つである。

かうしたもてなし、かうした世話、かうした愛情、かうした親切、瀧子の心はいつも吾が子松陰先生の心中に宿つてゐたのは勿論、吾が子の同志、吾が子の門生達のその何れの心にも宿つてゐたのであつた。村塾の隆昌も又この瀧子の心が大いに與つて力のあつたものである。

煎豆・番茶に、こうせん一杯

松下村塾では毎月一回詩會の催しがあるのが例となつてゐた。或る日詩會がはてた後で、松陰先生は久坂玄瑞に向ひ

「久坂、一つ詩吟をやつて聞かせ。」

と命ぜられた。日頃詩吟を得意としてゐた玄瑞は直に音吐朗々

「雪中の松柏愈々青し。綱常を扶植するは此の行に在り。」

といふ魏の參政が縛に就くを送る謝疊山の詩を吟誦したのであつた。座に連つてゐた高杉晋作、入江九一、寺島忠三郎、品川彌二郎等は孰れも皆感に打たれてゐたが、平生寡黙を以て聞えてゐた前原一誠は雙眼に玉のやうな涙を浮べて

「男子の本懐はまさに其處ぢや。」

と、只一言大音聲に叫んで一座のものを吃驚させたといふ逸話が残つてゐる。

この詩會のおあいそがいつも煎豆と番茶とであつた。瀧子の心盡しの煎豆、これも自宅の畑で自ら作つたものであつたらう。妹の千代子が番茶を炮じて持ち出したことであらう。それも母の瀧子の指圖によつたものであらう。

松陰先生が自ら「吾が良藥なり」と云つてゐられる人に、吉田無逸といふ人があつた。

安政六年十月七日即ち松陰先生の死刑の廿日前、どうしても先生は無逸の將來が氣にかゝつて仕方がない。何とかして彼の大志を伸べて勤皇義戦の第一戦に立たせたい。そこで高杉に後事を托せられた書中に

「榮太（無逸の名）遂に棄て難し。舊臘二十四夜、こうせん一杯吞で、榮太と別れしは永訣かも知れず。」

と云つてゐられる。このこうせん（米の粉を湯でねつたもの）一杯吞んで別れたと云はれた先生の眞情熱愛にハット胸を打れた無逸は、臆然決意して江戸に上り、彼の活躍舞臺に飛び出したのであつた。前原一誠は煎豆詩吟で發奮振起した。無逸はこうせん一杯で斷然死地へ飛

び込んで行つた。これは勿論松陰先生の精神的教化訓育の力であることは當然のことではあるが、この煎豆、この番茶、このこうせん、何れも母の瀧子の手をかけないものはない。母の瀧子の愛の籠つてゐないものはない。門生達には松陰先生の殉國精神が徹し、また母の瀧子の眞の愛情が浸透してゐたのであつた。

米つき臺の勉學

安政五年六月松陰先生が久坂玄瑞に與へられた書翰の中に

此節大暑中に候得共甚壯なり。隔日左傳八家會讀、勿論塾中常居、七ッ過會讀終る。夫より昌又は米春與ニ在塾生一同之、米春大得ニ其妙、大抵兩三人同じく上り、會讀しながら春之、史記など二十四五葉讀む間に米精け畢る、亦一快なり。

と云つてゐられ、また松下村塾零話（門人天野御民著）には

先生、前年藩籍を削り、祿を沒收せられ、其父杉百合之助の家に銅せらる。其後門人を教授するを許さる。依て其の家事を助る爲め、米を臼す。凡そ萩地方の米を春く器は臺柄と稱し中央に鳥居といふものあり、之を持って體を扶く。搗者は鳥居の後方に在り、助手は前

に立つ。先生、鳥居の上に見臺を拵へ、門人を助手となし書を授く、余も屢々助手となり大日本史を授けられたり。

と述べてゐる。實に先生の實踐躬行の教導の狀視るが如き感がある。この米搗臺（萩地方はこれを臺柄といふ）はいまも松下村塾に残つて保存されてゐる。これは松陰先生の父百合之助常道が先生兄弟幼時の際、常にこの臺上にて米を搗きつゝ讀書を授けられたものである。當時母の瀧子も臼の交合せや糠の篩いなどに加つたことであらう。自分（著者）も宵なべ仕事に家中一同がよりあつて米搗きをした幼少時の記憶がいまも存してゐる。かうしたことは松本あたりの風習でもあつたのである。

松陰先生はこの親の流儀を繼いで常に飯料米を搗きつゝ塾生と共に讀書研學されたものである。思へば米を春きつゝ先生と門生とが會讀する。糠を篩ひながら師の講義を聞く。實に愉快な場面ではあるまいか。これも松陰先生が自由に行往坐臥の間に自己の實踐そのものによつて感化訓育を徹底せしめんとされたものであらう。

かうした時に必ず現場に臨んで、何にくれとなくお米の世話や糠の始末など諸般の世話指圖をしたものは、母の瀧子であつた。塾生は學問では松陰先生の弟子であり、かうし日常渡

世のことについては瀧子の指圖をうけた弟子のやうなものであつた。

汚れ物の洗濯

松下村塾の經營は、杉家並に松陰先生の自辨であつて、別に月謝などはなかつたやうである。塾では一定の日課や教授時間もなく、従つて始業終業の規定もない。されば毎日出塾講の必要もない。しかし時には夜をも徹してやる。云はゞ年中曆日なしの休日なしであつた。かやうなわけで、いまでも次のやうな逸話が残つてゐる。

月謝一文も出さずその上塾に泊つてゐたものも十名ばかりあつたが、年を取らない青少年の事であるから、着物の洗濯などはとかく放任勝ちであつたが、瀧子夫人はいつも塾に来て、汚れ物があれば持ち歸つて洗濯をし、その他一切の世話事は皆夫人を煩はしたものである。又塾では時々討論會などをして互ひに議論を闘はし、冬の夜の深更に及ぶことなどもあつた。そんな時には瀧子夫人は講義の間の隣室で火鉢に火をおこして、煎豆やかき餅をやき、熱い番茶などを振舞はれることが常であつた。

これで見ると、瀧子は餘程よく氣のつく人情家であり、吾が子のやうに世話をされた松下

村塾の寮母でもあつた。

柿や蜜柑の開放

村塾の前横に老ひたる大きな柿の木があり、又蜜柑の老樹もあつたやうである。これ等が熟すると母の瀧子はその初物を取つて、先づ先祖の神前にお供へした後は、いつも塾生達に自由開放して、かれ等の意のままに任せて置いたのである。それであるから、塾生達には木に上つて熟柿をとつて喜ぶものもあれば、勉學の暇に蜜柑をとつて、先生と共に悦び味はつたものもあつた。さすがに瀧子は青年塾生達の心をよく捕へてゐたものである。

柿は松本柿といつて、この邊の名物である。いまの幽囚室の横にも一本の柿の老樹があつた。この柿の木の實を母の瀧子が誠心こめてつるし柿として、野山獄中の先生に送つたものである。

村塾の増築

松下村塾の塾舎は杉の隣に瀬能といふ家があつて、それが賣り物に出たので杉家に於て購

入せられ、その本宅は解除して畑となし、茶席の方だけを残して、下女などの裁縫部屋に使はせてゐられたものである。畠の中の僅かな八疊の一室であつて建物も古く既に荒れ果て、戸も障子も疊も一切ないあばら屋であつた。こゝで、松陰先生は最初莫藎を敷いて教授されたのであつた。その中に弟子もだん／＼増して來たので、一人に付き三厘宛出金さして、古疊を買ひ入れて敷くと云つた、實に粗末なものであつた。

處がその後先生の人格學識を慕ふて集り來るものが漸次増加し、狹隘を告げるに至つたので、安政四年七月久保清太郎等の意見によつて愈々増築さるゝことになり、新に六坪二合五勺（十疊半と土間一坪）の古家を買つて一室を加へることになつた。

この時、門生等は各々その長所に應じて勞役に當り、或る者は鋸をとり、或る者は土石を運ぶと云つた仕組であつた。中谷正亮が總監督で、品川、山縣等は屋根を葺き、松陰先生自らも勿論これに参加された。品川が誤つて先生の面上に土を落とすと、先生は別に怒りもせず微笑されたといふやうな話も残つてゐる。かくして地均し壁塗等一切が門生の手で出來上つたのがその年の十一月五日のことであつた。

かうした場合に、あの瀧子の氣性として拱手傍觀してゐる筈がない。愛兒統率の學舎が

増築される。それが門生達の手によつてつくられる。瀧子の心の喜びはどうであつたらうか。それだけに工事中は何かと心を使ひ、世話も心配もしたことであらう。時には多人數の食事の用意もしたことであらう。時には夏の日長のお三時に心を碎いたことでもあらう。時には風呂に入れて愉快にかへしたこともあらう。かうした瀧子の心からなる親切が門生達の心の奥底に透徹して、村塾はますます／＼繁榮を來たしたのである。

塾における女兒の教育

松下村塾では勿論正式には女子の入門、弟子入りはなかつたやうである。しかし松陰先生はあの封建時代に於いて、忠臣孝子は貞女烈婦の門に出づ、天下の志士を養はんとするには先づ女子教育、換言すれば家庭の母性教養に力を入れなければならぬと云つて、この方面に既に相當深い理解と關心とを有してゐられたのである。

これがために、かつて村塾の客師であつた富永有隣をして女誠譯述なるものを著はさしめられて、その敍文の中に

翁（久保塾主久保五郎左衛門）廢後、讀書筆札を以て邑の子弟を教ゆ、最も女教に留意す、女

大小學、女式目より、讀書を以てし、女徒に授けて之を讀ましむ、尙未だ足らずとなし、余を促して之を成さしむ。

と云つてゐられる。これをみれば、よしや女弟子といふべき筋合の者でなくとも、松陰先生には數人の妹があり、近所の女友達が杉家に遊びに来る。勿論これ等は久保塾の女弟子の人々でもあつたらう。さすればあの先生の氣質として、また女子教育に關心を有してゐられた關係よりしても、これ等の女子等を集めて女誡や女訓などを種本として貞女烈婦の話などをされたことは當然のことであらう。女の修身教書や又は通俗的な百人一首の講義などを聞かしてやられたことであらう。それに杉家の因會あたりで相當の經驗もされてゐたことでもあつたらう。松陰先生自らも

「阿嫂、群妹のために武士女鑑を讀む（安政三年十日）」

とも云つてゐられる。かうした場合には、いつも母の瀧子が

「サア大サン（大次郎即ち松陰先生）の講義が始まつた、皆行つて聞きましたよう。」

と云つて自分で先頭に立ち、娘や遊び友達をつれて講席に侍したことは、後年揖取家に嫁した妹の美和の話であつた。

かつて松陰先生が入江九一の妹入江すみといふ女兒に書き與へられた句に

女でもかんざりよりはこうがいか

と、美しいかんざしに頭を飾る娘時代を楽しむのもよからうが、それよりも早くとついで一家の家政を料理する主婦となつて、筭をさす方がうれしからうといふ情緒の一句の中に、慷慨といふ文字を讀み込んで、今の時代の娘達は容色を飾るよりも、しかと國難を自覺して、憂國慷慨の氣性を持たなくてはならぬと戒めてゐられる。如何にも松陰先生らしい面目が躍動してゐると共に、母の瀧子は愛兒寅次郎を通じて村の女の子達等にもこの憂國慨世の心を養はしめたのである。瀧子の生涯はいつもかうした蔭の力であつた。而かも、このかくれた力が偉大の果實を生み出したのであつて、瀧子のこのホントの姿を見忘れてはならない。茲に日本婦人の眞のあゆみがある。何にも外形的に、また社交的に活潑にやつてのけるのが日本婦人の本然の姿ではない、寧ろしとやかに靜かに蔭の力となり、己れを犠牲にして我が子を育て伸暢せしめて行く、この神祕な有難い母性の純潔崇高なる正姿を見守つて行きたいものである。

母性愛に寅次郎は泣く

松陰先生再び野山獄に入らる

松陰先生の高潔なる人格、深遠なる學識は勿論、その烈々たる熱火の如き憂國の至誠に迸る時事對策に關する論議は、巴城に於ける當時の青年學徒をしていたく血を湧かし發憤感激せしめたものであつた。従つて松下村塾に來集するものは日々に増加するのみであつた。唯に巴城々下のみではなかつた。長門の北端たる須佐の育英館（小國剛藏統裁）の同士數名が來る。後には遂に村塾との門生交換教授にまでも進展した。周防南部戸田村の壯士二十六名が來塾して連日銃陣を學び、遂に巴城郊外大井ノ濱で實地演習を行ふといふが如く、各地方よりも多數憂國の同志が雲集するといつた盛況を呈するに至つたのである。學術の研究に、時事問題の對策論議に、更に實地への猛訓練に、村塾は非常なる勢を以て増大進展し、その烈烈たる冲天の意氣は既に天下を呑むの觀を示したたのである。

従つて塾舎は十八疊半に増築擴大さるゝ、師匠は松陰先生の外に富永有隣、久保清太郎、

小田村伊之助、中谷正亮等が客師又は助教の形で大に力を入れて來る。門生も久坂玄瑞、高杉晋作、桂小五郎、吉田無逸、前原一誠、入江九一、寺島忠三郎、杉山松介、駒井政五郎、時山直八、松浦松洞、野村和作、品川彌二郎、有吉子徳、伊藤俊輔（博文）、山縣狂介（有朋）、山田市之丞（顯義）等何れ劣らぬ憂國烈士が日夜心魂を打ち込んで、眞劍なる尊攘大義の魁に血みどろの活躍下地を作つて行つたのであつた。

かういふ周囲の雰圍氣が醸成されては、村塾の動向も只單なる學術の論争や名分論の追求や上書建白などの筆陣などでは到底収まるものではない。そこで安政五年の秋頃よりは村塾の實際運動、直接行動といふ状態をはらみ出すの勢となつて來た。

一面天下の形勢はいよゝ急迫して來る。時事の對策は一刻も緩うするわけには行かない。あの烈々熱火の如き實踐主義の師松陰先生、これに統率さるゝ血に燃ゆる門生達が、どうしてこの非常國難を坐視黙過することが出來やうか。

議論よりいまは實行だ。尊攘の大義を明にして君臣の名分を樹立し、この神州の國體を護るのはいまであり、又われらに與へられた唯一の責務であると考へ出したのも當然のことである。そこで松陰先生は奮然決意、百の議論建白よりも一つの實踐運動、直接行動だと愈々

最後への一步を踏み出されたのである。

安政五年の九月、當時江戸にゐた門人松浦松洞に對し

「一人の奸猾さへ仕候へば天下之事は定り可申、入鹿を誅した事實を覚えてゐる人は一人もなきか。」

と云つて、水野土佐守の暗殺を示唆してゐられる。これは紀伊の附家老である水野が慶福を將軍繼嗣とするの策に成功し、幕府に喰ひ入つて堀田正睦と結び、違勅調印を促し、井伊大老は水野の指囃を受けてゐるものと松陰先生は解してゐられたのであつた。續いて「時勢論」なるものを作つて、門人伊藤傳之助に托して上京せしめ「天下に勅を降し有らゆる忠臣義士御招集」の上、この際外夷攘伐の正義を建てらるべしと云つて、大原三位卿の長州西下を請ふてゐられる。また十月には先生の知友で梅田雲濱の門人であつた赤根武人をして當時雲濱の捕縛されてゐた伏見の牢獄を毀さしめ彼を救ひ出さんとの一策をも授けてゐられるのであつた。

十一月に入つては井伊大老安政大獄の片腕であつた間部老中が、京都に入つて志士捕縛の衝に當るといふので、彼を生かしておいては國家の不吉であり、同志のためでない。彼を要

撃して勤皇の一番槍を挙げやうといふので、同志十七名の血盟をも得てゐられるのであつた。

當時に於ける松陰先生の心境ともいふべきものは

神州積衰、一朝一夕の故にあらず、しかのみならず、近日夷虜猖獗して皇威を屈撓し、而かも征夷諸侯これを制すること能はず、こゝに於いて私の心慨然として曰く、攘夷の事實、吾が輩にあり……奉勅の責固より吾が輩にあり。

と尊皇攘夷の責任を松陰先生自己一身の上に收められ、また國家の安危をも一身に負ふて、かくなることは即ち松陰自身の責任であると感念されたのである。こゝに勤皇志士としての松陰先生があり、殉國殉道者としての松陰先生があり、あの純潔至誠の熱烈なる精神が如何にも躍動してゐる。かう考へ出されてからは、最早謹慎の身などを顧みられることもなく、すべての事を自己一身の責任として驟然奮起、勇猛々と門生を叱咤しつゝ、斷然直接實行運動へと踏み進み出されたのである。

驚いたのは藩政府要路者である。さう無暗に暗殺計畫を進められてはたまつたものではない。直接行動々々と旗を振られては大變である。若し幕府に漏洩でもすれば藩の責任は勿論、諸方多人數に思ひがけぬ迷惑をかけることにもなる。そこで、「松陰學術純ならず人心を

動搖さす」といふ如何にも不明瞭な罪名のもとに、再び家庭に嚴重謹慎させ、續いて野山再投獄となられたのが、年の暮も迫つた安政五年十二月二十六日であつた。

そこで、入江、寺島、品川、吉田、吉世(前原)、久保等八名の門生は憤然躍起となつて、わが師を如何なる罪名によつて投獄するか、甚だ不服であると云つて、一晚中藩の役人を歴訪して回答を求むるといつた一大騒動となつたのであるが、その翌日彼等は不穩の舉動ありとして何れも謹慎幽囚の憂目を見るに至つたのである。

思へば尊攘の大志を抱き、至誠殉國の一念を以て自ら國難に當らんとして、血の滴たる、火の吐き出づるやうな憂國慨世の活動も、遂に野山再投獄といふ悲しむべき親子師弟訣別の最後の日が來たのであつた。

父の百合之助は

一時屈するのは萬世に伸びんがためである。これ位のことでは力を落してはならない。まあ我慢をするがよい。

と、愛と涙のあふるゝ教訓を與へたのであつた。實にこの父あつて、この子ありと云ふべきであらう。否、これは父のみの考へではなかつたらう。父のみの慈愛の言葉ではなかつた。

母の瀧子も兄妹も皆かうした愛と涙で先生をいたはり慰め且つは力付けして、再び野山の獄に送つたのであつた。

先生獄中に絶食を決意さる

安政六年の元旦、松陰先生は又々野山の獨房に年頭を迎へらるゝの身柄となられた。

九重の惱む御心思ほへば

手にとる屠蘇も呑み得ざるなり

と一首を詠じてゐられる。實に痛々しい切々たる憂國の至情が誰人の胸底にも強く響いて來る。それに昨秋來計畫示嚇された度々の謀策は何れもみな未遂不成功に終つて、先生の心を慰むるものは一つもなかつたのである。ましていま獄中より靜かに外間的事を眺めれば、時世は日々悪化急迫を告ぐるのみである。間部は京都に於て勤皇の同志を悉く捕縛し、正義の公卿を弾壓し、遂に朝廷にせまつて攘夷猶豫の勅許さへも得たのである。丁度十二月の末、その頃水戸の密使關鐵之助、矢野長九郎の二人が萩に來て、長水提携の上尊攘の旗擧げを策したが、萩政府要路にはこれを引き受けるだけの人材もなく、空しくかれ等を失望させて萩

を去らしむるに至つたのである。また安政六年正月には、播磨の大高又次郎、備中の平島武二郎が來萩して、來る三月毛利藩主が参観の途中を伏見に要して、尊攘の旗擧げをなさんと協議を持ち込んで來たのであつた。松陰先生は喜び賛成して大いに周旋を試みられたが、この兩人も藩の要人と十分話も出來ず、要領を得ずして無念の憾を残し萩を去るに至つたのである。

それにこの前後より、松陰先生の知友門人間には、四圍の情況よりして勤皇倒幕運動は未だ時期尙早であると感じ始めるやうになつて來た。當時在江戸の門生高杉、久坂を始め、中谷、尾寺(新之丞)、飯田(正伯)等は江戸の狀況に照し合せて、いま事を擧ぐれば師松陰先生の身上に異變が起るかも知れない。のみならず義擧は尙早きに失し、却つて社稷の害を招くやうなことがあつてはならぬ。として、「御互ひに國のため鞠躬盡瘁可_レ在、夫れまでは胸を押へ鋒を斂め、何れも社稷之害仕出かさぬ様、國の爲萬々奉_レ祈候」とまで云つて、一種の勸告狀さへも送つて來たつたのである。けれども、あの烈々鐵火の如き松陰先生の憂憤は到底堪へ切れなかつたのであつて、當時松陰先生は

江戸居の諸友、久坂、中谷、高杉なども皆僕と所見違ふなり、其分れる所は、僕は忠義をする積り、諸友は功業をなす積り、乍_レ去人々各所_レ長あり、諸友を不可とするにあらず、

尤も功業をなす積りの人は天下皆是、忠義をなす積りは吾同志數人のみ。

と云つて、天を仰ひで長嘆息し、地に伏して涙を下してゐられる。更に言を續けて忠義をする積りで功業が自ら成るのは聖代の美事である、松陰の考ふる所に従へば、幕府の違勅に端を發して、我が國の名分が紊れ大義が湮滅しようとする濁世に當り、功業を目的とすれば大義名分は第二義となり、己を大義に殉ぜしめようとせずして、大義を表面上の口實とはなしながら、實は己の功業を立てようとすると、だから縦令諫死でも戦死でも、兎も角、死ぬのは徒死である。生きて居らなければ功業は出來ないから、かくては大義で濡らした手を以て己の欲する粟をつかもうとする利己的な態度に外ならない、然るに忠義をしようとする者は唯胸中の耿々たる者の命する處に従つて「慈母の愛、父叔の責は人情の堪へ難き所」ではあるが、非常の事をなさずにはゐられないのである。孔孟(孔子と孟子)が生國を離れ、釋迦が山に入るは皆常情ではない、松陰の勤皇も亦この己む能はざる一片耿々たる精神の發現である。而かもこの精神たるや、松陰が勝手に作つた獨斷のものである。人各々その深きに於ては皆持つて居る所の大和心である。これは恰も大地の底に普く水が潜んでゐると同様である。先覺者先憂者はこの地下水の最初の出口を與へる人で

ある。云々。

と、血潮の滴たる烈火の熱言を與へて、諸友同志とも絶交往復を絶つ心の心を定められ、その正月廿四日には

吾が尊攘は死生を以てす、自ら惟へらく、以て天地に對越すべしと、豈圖らんや、初め小人俗吏之を憚り、中ごろ正人君子之を厭ふ、終りにして平生の師友最も相敬信する者、交々吾を遺棄し、交々吾を沮抑す、尊攘爲すべからざるに非ず、吾の尊攘を非とするなり、尊攘自ら期して尊攘を非とす、吾事已んぬ、然らば則ち如何せん、其れ積誠に由りて始めんか、吾の尊攘誠なきなり、宣なり、人の動かざることを。

と云つて、殉道的な自己反省に沈まれ、その後は更に無用の言をなすまい、そして冥想沈思、至誠の功驗を省みてみよう、死生の如何を天に聽かう。そして遂にこの廿四日の午後から薄暗い獄屋の北房御一舎に於て、隙間も寒風に正坐しつゝ、絶食して死を待たれたのであつた。

翌廿五日同囚門人の安富惣輔が驚いてこの様子を松陰先生の兩親に報告した。それから玉木叔父にも知らせられ、門人等も傳へ聞いて杉家に集まるといつた騒ぎとなつた。弟子の増野徳民が早速父と母と叔父との懇諭の手紙三通と、母の瀧子の心盡しの手料理とを持って、野山

の獄に駆け付けたのであつた。憂慮焦心は誰の心も同じであつて、夫々の思ひ思ひをこめて先生の思ひつめられた一徹短慮を諫め一刻も早く思ひとゞまらしめようとしたのであつた。

母性愛に溢るゝ瀧子の手紙

つれない運命に弄ばされて、思ふこと爲すことすべてが志と違ひ、再び野山獄に引かるる吾が子寅次郎の不惑さ可憐さを胸に抱いて、獨りで夜毎に熱い涙に袖を濡ふした母の瀧子は、十二月五日寅次郎又々投獄と聞いてからは、如何にあの氣丈夫な瀧子も幾夜となく悲しい思ひに悩んだことであらう。せめて冷たき獄中生活にさはりのない様にと、それ以來といふものは日毎夜毎に用意萬端準備を整へて、「獄中蒲團二枚、重ね毛セン、小蒲とん、よぎにて酒氣未レ解内に明け申候」と、入獄の翌日先生自ら云つて報告してゐられる如く、蒲團や夜着の用意を整へ、それに暫しの別れとあつて、どうぞ健康であれかしと酒盃までも家人とさし交はさしめて送り出した愛兒寅次郎が、いま絶食死を待つとあつては、誰れよりも一段と深い悲しみと驚きとを覺えたのは母の瀧子であつたらう。瀧子は、この悲報、この驚報を耳にするや、熱き涙を拂ひ、直に一書を認めて

一寸申まいらせ候、そもじ様いかゞ御暮し被_レ成候や、さきほどにふりよ(不慮)の事、うす／＼耳に入、あまりきづかしさに申進めまいらせ候、きのふより御食事御たちとか申事のよし、おどろき入り候、萬一それにて御はて被_レ成候ては、ふこ(不孝)大一、口おしきしだいにぞんじまいらせ候、はゞ事もやまいおふく、よはり候、ながいきもむつかしく、たとへ野山やしきに御出候ても、御ぶじにさへこれ有候へば、せい(勢)になり力になり申候まゝ、たなりよ御やめ御ながらへのほどのりまいらせ候、此品わざ／＼とへのさし送り候まゝ、はゞにたいし御たべ頼みまいらせ候、いくへも／＼御心御ひきかへ、かへす／＼もいのりまいらせ候、めで度かしこ

大様

はゞより

(安政六年正月廿五日)

と切々たる悲しき涙に一文を綴つてゐる。「うす／＼耳にした」と、昨秋以來の事のかす／＼に瀧子は陽に陰に心を碎いて、わが子の身上を案じ暮してゐたやうである。それが遂に絶食徒死となつては瀧子の心は裂んばかりであつたらう。「不孝大一、口おしきだいし」と云つて、血を吐く思ひに泣いてゐる。大次郎よ、親に先き立つて死ぬといふ不孝の大事を考へてく

れないのか。幼少の頃よりあらゆる艱難辛苦をなめつゝお前をかうして育て、来たのも、お國のために御奉公させたい母の心の山々からであつた。それに今一念短慮から絶食死を待つとあつては、これこそほんとの大死である。かねてから子供を尊攘義戦の第一線に送り出してからは、死は覺悟の前であつて、別に悲しみもくやみもしないが、どうぞお國のため死んでくれ、萬世不朽の人間となるために死んでくれ、それに絶食とは何事であらうか、母のこの悲哀心痛を考へてくれるなれば、如何に時世が非、如何に素志が通じないにしても、一時の憤激で徒なる死を急ぐとはどうしたことであらうか、お前は最早氣が狂つたのか、日頃のお前には似合はぬ仕打ちではあるまいか、この母にはこれが口惜しくてたまらない、と慈愛と眞情とを籠めて諫め且つは慰めてゐる。それに、この母も近頃はとかく病が多くて大分弱つて來てゐる。これでは、もう長生も六ヶ敷ことであらう。せめて私の存命中に、お國のために働けるだけ働いて御奉公してもらひたい、たとへ獄中生活なりとは云へ、無事であつて頂けば、その中には運命も開けて志の通ずる時もあらう、母はお前の無事といふことが何よりの心慰めである、母に免じて、私の愛と誠をこめて作つた食品を送るから、是非喰べておくれ、早く／＼と、母性愛の溢るゝ眞心のあらむ限りを盡してわが子寅次郎を諫めて

ゐる。思へば補正行のもろ手より懐剣を奪つて諫めた母よりも、もつと愛がこもつてゐる。そして庭先きの柿でつくつたつるし柿を送つてゐる。柿の糖味は精力回復の最妙薬と昔から語り傳へてゐたからであらう。

世の母として、わが子に對す愛情には何ら變りのあるべきものではない。子を思ふ親の心は誰人も同じである。しかし、その愛兒が不幸なれば不幸なる程、不運なれば不運なるほど、母親としての焦心苦慮はいやますものであらう。それに父も母も兄も妹等も、みなくこの不運不幸の殉國熱血兒寅次郎に對しては、何れも心からその夙志大志を成就せしめんと、朝な夕なに神かけ念願して力をつけてゐたのであつた。従つて松陰先生の幕禁失敗に當つて、父も母も、叔父も、たとへ謹慎責罪に問はれても、些々たる不満もなければ不平もなかつた。小言一つ云はないで、喜んで松陰先生の再舉殉國への勇猛心を願ふといつた、それは一家一族擧つての殉難振りであつた。

それだけ松陰先生の如き人傑が、絶食死といふが如きあえなき死様に對しては、口惜しき残念の極みであつたらうと共に、先生の如き忠誠偉大な殉國士の出來たことも決して偶然ではない。それにしても純眞な母性愛の誘導がどれほど力強かつたことであらうか。

松陰先生は母の瀧子のこの手紙を受け取つて、冷たき獄中に端座のまゝ、一字一讀、一句再讀、感謝の涙に咽ばれつゝ、感謝の熱情で胸一杯になり、涙のとゞめやうもなかつたのである。幾度か押し戴いては讀み、押し戴いては感泣せられ、遂に母のせいになり力になり申さねばならぬ、母にたいしてたねばならぬと感念されて、その日の夕刻から、あの母の眞心籠つた吊柿一つと水一碗とを飲まれて思ひ止まられたのである。松陰先生のおの一徹な性情としては、一度決意された上は巖よりも堅いその心も、母のこの手紙にはもろくもこはれて、それより後は平常の如く食をとられることになつたのである。思へば母性の心力ほど崇高なるものはない。母性愛ほど強いものはない。この母の強き心と愛とがあつた吉田松陰といふ幕末維新の尊攘殉國士を育て上げたのである。

諄々と説く父百合之助の手紙

愚父事も病氣全平癒、一昨日國相府え快氣屈罷出、御手元唐船方其外御用所内へ廻禮相濟せ、昨日は内居休息して、今日は早朝より廻禮罷出、薄暮比罷歸り候處、御同囚安富氏より報じ候趣、夕飯後に塾へ申參り候由にて、小田村、佐世、岡部諸人殊之外愁嘆、種々心配

母性愛に寅次郎は泣く

母性愛に寅次郎は泣く

一八〇

仕候處へ拙者歸り來り、梅太郎を其元え遣し、食事等御勸めいたし、現場見届候て孰れも安心仕度、早速梅太郎呼に僕を登らせ候へ共、行先相分り不申、只様猶豫に相成候に付、徳民差越申候間、何卒父母叔父等之異見御用ひ、母より送り候品御食し祈り申候、いへにも此度之御思ひ立甚不宣短慮の至り、委細は文之進其外より存寄申越候に付、號泣して之に御従ひ、猶捨己同志之人に御従ひ祈る所に候可祝。

廿五日

百合之助

寅次郎様

と、父の百合之助は病氣も癒つて病中見舞の返禮や、寅次郎投獄延期の御禮やらで役所方を廻禮して歸つてみると、思ひがけなくも絶食待死の此の始末、百合之助の驚きは一方ではなかつたらう。早速兄梅太郎を野山獄窓に差し向けて、諫言を與へしめ様としたが梅太郎は不在、さりとて猶豫は出來ぬとあつて、先生愛弟子の増野徳民をして、父と母と玉木叔父との書状を持參せしめ、親達の意見を用ひよと諫めつゝ、「此度之御思立ち不宣、短慮の至りなり」と溫和の中にも嚴然としてその不心得を諭し意見を加へてゐる。そしてかうした昂奮時

には父として正面より餘り強くいふのもどうかと考へたものとみへて、叔父の玉木をして思ふ存分に意見を加へしめ、それに従へよと云つてゐる。また號泣して自分を捨て同志の人に從へよと、言葉尠なきその中にも眞情眞愛のこもつた言葉を以て絶食死の即時中止を勸告してゐる。更に「母より送り候品御食し祈り申候」と云つて、日頃より一しほお前を可愛いがつてゐる母の心中にもなつてみるがよいと先生の至孝な純情に訴へてゐる。あの熱血有情至孝の松陰先生としては、定めし寒風身にしむ野山の鐵窓より韓人峰下の松本の空を望みつゝ、熱き涙に泣き伏せられたことであらう。嗚呼、孝ならんか、忠ならんか、生きて甲斐なく、死せんとして死する能はず、事悉く志と違ひ、また尊攘の大義も滅することなきかと、それこそ衷心から號泣慟哭された事であらう。

玉木叔父の嚴然たる勸告狀

松陰汝一兩日被致絶食一候由、扱々驚入候事に候、加様見識之違ひ候程之事は有之間敷と兼ては存居候處、扱々驚入候事に候、今般之儀、若し餓死にも及候ば、短慮と誠に世上之笑種口惜きと申も餘り有之事に候、且勤王之一義において何の益ありや、平生短急之性

母性愛に寅次郎は泣く

一八一

質、其上道理之見違ひも可^レ有^レ之哉と見受居候事も段々有^レ之候へ共、兎角に義を以て恩を破る事も可^レ有^レ之哉と考へ、嚴き存寄りも不^ニ申聞、素より私見を逞する一段、近比別して相募り居候様相見候得共、先強て之儀も無^レ之候はゞと、恩愛之情に引れ、再在年月を経る内、斯様の大間違ひに至り候ては、大恩の父母え御歎きを懸け奉り奉^ニ恐入^一候、大罪人に陥り可^レ申と申せば、例の私見を逞し、大義には親を滅す、父母の歎き位は何歎とも可^レ申哉と存候へ共、汝獄中之餓死、大義において何の益あるや、兎角安富とか與へられ候書の通、汝方食飲講^レ學、養^レ生練^レ心、待^ニ出獄^一、然後大報^ニ國恩^一と有^レ之、他人え申聞する事には眞の道理かと思ゆる所を見付、自身の事に至り候へば、くら闇みに相成段、誠に可^レ恠事に御座候、安富え與^レ吾非^ニ一般^一也と申贈り候へ共、一般にこそ可^レ有^レ之管、非^ニ一般^一譯一圓分り不^レ申、兎に角も夫等之道理は後日追々往復論辯可^レ致に付、今晚より食を復し、父母に受る身體御養生肝要の事に存候、折角此内より焼酎藥杯と、獄中無病に有^レ之かしと御心配も有^レ之、中に絶食餓死共と申事は何共合點不^レ參、後日の論々、大急事、病を勉め筆を取、前後錯亂幸に御推覽、愚が心を察し、梅兄え御口答待入候以上

廿五日

寅二郎様

嗚呼、この手紙ほど情理兼ね盡せるものはあるまい。肉身の眞の慈愛より迸り出た諫言であり勸告状である。松陰先生を幼少の頃から、自ら親しく手鹽にかけて育て上げた叔父であり、全心魂を打ち込んで尊攘の大義に殉ぜしめんとした唯一の師匠である。殊に政府要路者でさへ、玉先生と呼んで畏服してゐたといふ玉木文之進だけあつて、威丈け高となつて嚴然秋霜の如く、「松陰汝」と呼びかけて絶食餓死とは何事ぢや、松陰氣が狂ふたか、世間の笑ひ種が口惜しくて、この叔父はもはや生きてゐる心地がしない、松陰よく考へてみるがよい、今日までそちの處業に對しては随分云ひ聞かせたい事も數々あつたが、大義殉國の義心に免じて餘り多く云はなかつたが、絶食餓死が勤皇の大義に何んの益があるか、これ位のこと、俺が日頃の教育指導によつて少しは解つてゐる筈である、それにやゝもすれば理窟を列べて大義には親を滅すなどといつてゐる、獄中の餓死がそも、大義に於いて何んの益があり關係があるか、父母に嘆きをかけ大不孝の人となつて、それでなほ人倫が許されると思ふのか、他人には生を養ひ心を練つて大に國恩を報すべしなどと道學を講ずるお前が、自分の事にな

母性愛に寅次郎は泣く

つては更に道理も辨へず恩義も解せず、迷ひに迷ふて絶食餓死とはそも何事であらうか、サア議論があれば思ふ存分するがよい、この叔父がすべてを引き受けて、何んとも論辯してみせる、この叔父が永年眞情を盡して全魂力を打ち込んだ今日までの教育はそんなものではなかつた、松陰どうちや、よく解つたか、心の迷ひが解けたか、兩親にこれ以上の心配悲嘆をかけず、兄妹等の心にもなつてやれ、憂惱してゐる門人達にも安心させる様に直に思ひ止つて、母の心盡しの食事をとるがよい、病を押してこの叔父は大急ぎで筆を走らせた、お前の口より直接梅太郎兄に否應の返事をして呉れよ、これが叔父の願ひであり、その返事のみを待つてゐると、言々句句涙に導かれつゝ、したゝる生血に筆を染めて、ぐつと強く深く松陰先生の心魂に徹する底の意見を加へたのであつた。

思へば、この手紙は叔父玉先生の高邁なる識見によつて認められたものである。しかし、かうした思ひは叔父のみではなかつたらう。父の思ひも母の思ひも兄妹の思ひも門生達の思ひも皆々同じことであつたらう。父と母と叔父より、かうした愛と嚴との響合せる勸告状を受け取られた松陰先生は、泣ひて感激されつゝ、すまなかつたと「水一碗、釣柿一つたべ申候先づ御安心奉願候」と、野山北房の寒風に身をさらしつゝ、前非を悔ひて泣きあやま

つてゐられるのである。こゝに、松陰先生のあの純眞な尊い反省を見出さずにはゐられない。實際先生ほど純情で無垢で崇嚴な高潔な人格者はなかつたのである。

そこで、松陰先生は遂に絶食死の初心を離へし、父母叔父のこの慈愛溢れる難有き誠心を押し頂きつゝ、骨を削らる思ひをして食事を取らるゝに至つたのであつて、その時左の一詩を賦してゐられる。嗚呼、思へば母の瀧子の愛と眞心とが遂にあの勇猛な松陰先生を征服したのであつて、仰ぐべく尊ぶべき偉大なる母性の神力が顯はれてゐると云ふべきであらう。

斷食慮_レ驚_ニ父母心_一。 斷食、父母の心を驚かしむるを慮り

只於_ニ酒肉_一自爲_レ箴_一。 只酒肉に於ては、自ら箴と爲す

平生交友情皆絶_一。 平生の交友、情皆絶つ

憂國思兼_ニ夜漏_一深_一。 憂國の思ひは夜漏(夜の更けること)と兼に深し

明けやすき最後の一夜

五月雨の獄中、悲涙愁傷

野山再投獄後の松陰先生は、冷き鐵窓五ヶ月の間、百憂萬苦の事案が次から次へと去來輻輳して、いはゆる松陰先生の「心蹟百變」となつて、數多の辛酸難苦に思ひ亂れたのであつた。

「僕投獄以來、外は日々怪事を聞き、内は日々古人激烈悲壯の文をよみ、内外相抗し遂に絶食死を求むるに至る。」

と云はれ、その藩主參觀の伏見要駕策に對しては、早くも門生間に反對論が起り、平生の所謂同志、今は乃ち國賊なり」とまで云つて憤怒されてゐる。遂には「吾一日も此の世に居る事を欲せず、一死を賜はり候様御周旋被下度候」と門生に依頼してゐられるが如き鬱々憤懣の心境であつた。

終始かうした苦窮難迫と戦ひつゝ夢も靜かに結び得られぬ獄中生活も、遂に五月雨暗き五

月十四日の江戸檻送事件となつたのである。

五月十四日の朝、兄の梅太郎は野山獄舎に寂しく弟寅次郎を訪ねて

「寅次郎、お前は近く江戸に行かねばなるまい。」

と、言葉すくなに報じて、後は悲痛の狂瀾がヒシ／＼と胸に迫り來つた様子であつた。

それに對して松陰先生は

「そうか……」と只黙然としてゐられた。しかし間もなく、先生の面上には悲痛にも不動の決意が濃く現はれて來たのであつた。

それ以來といふものは、親兄妹は勿論親戚故舊を始め門生一同に對し、細々とそれ／＼書信を發して最後の別れを書翰や詩文に認められ、また自己の身邊の後始末や、此後の指針などを書き示してゐられる。いまその一二を摘録すれば、父の百合之助に對しては、「此度之東行は國難に代るの存念に御座候得ば、兼ての狂悖には随分出かしたると奉存候云々」と云はれ、妹等に對しては、「各其家を齊へ夫を敬ひ子を教へ、親族の肝をやかせぬ様にするが第一也」と説かれ、土屋蕭海や小田村伊之助には借覽書籍の後始末を依頼せられ、更に入江杉藏には「我誠徹底せずして死ぬる程なれば猛士大恥辱なり」と江戸行の決意を語つてゐられる。

松陰先生の最後は實に血涙中の奮闘であり、奮闘中の血涙ともいふべきであつた。殊に父百合之助には左の一詩を贈つてゐられる。

平素趨^レ庭違^ニ訓誨^一。平素(日頃)庭に趨り(子が親の教をうくること)訓誨に違ふ

斯行獨識^レ慰^ニ嚴若^一。斯の行・獨り嚴君を慰むるを識る

耳存文政十年詔。耳に存す・文政十年の詔

口熟秋洲一首文。口に熟す・秋洲一首の文

小少尊攘志早決。小少より尊攘の志早く決す

蒼皇興馬情安紛。蒼皇(あはたしきこと)、興馬(護送といふに同じ)、情安んぞ紛せん

溫清剩得留^ニ兄弟^一。溫清(孝養をなすこと)剩し得て・兄弟に留め

直向^ニ東天^一掃^ニ怪雲^一。直に東天に向つて怪雲を掃はん

と、眞にその親を知る子であると云ふべきであらう。松陰先生は親を慰むる眞の孝養を知つてをられたのである。

また妹等に對しては

心あれや人のほたるいましらよ

かゝらむことはものゝふのつね

と、一首の歌を書き残してゐられる。實に千歳不朽の女子鑑ともいふべきであらう。現代非常時日本の婦人の覺悟もまさにこゝにあらねばなるまい。

妹等も、はかなき兄のいまの境遇に熱き涙を濺ぎつゝも、この一首の歌に嚴然と心を取り直して、兄の將來に、このうへ憂きことのなかれかしと祈つたに違ひはあるまい。

この十日間、獄中なりとは云へ、松陰先生にとつては仲々忙しい毎日であつた。まるで夢の間のやうに過ぎ去つた二十四日の夜、愈々最後の別れの日が來たのであつた。

松陰先生獄を出で實家に歸へらる

獄司で門人の福川犀之助は、これが最後の永訣であるかも知れない、師弟の情義としてせめて兩親を始め一族の人々や門生達にも最後の面會をさせて、名残りの一夜を明かさせたいと思ふ一念から、藩府の諒解も得ないで、久坂玄瑞と計つて先生を松本の實家に歸へしたのであつた。實家にかへられた先生の心中は既に再び萩の故地を踏むことは出來まいと覺悟されつゝも、流石に母親にはその意中を打ち明けられることが出來なかつたのであつた。

杉家では内證に訪ね来る親戚や門生等を集め、松陰先生を中心として心ばかりの訣別の小宴が催されたのである。舊懐談もあつたであらうが、定めし悲痛の場面でもあつたらう。その席上の手料理は定めし母の瀧子の心盡しであつたことでもあらう。

その最中に一枚の紙が展べられて早速寄せ書きが始まつたのであつた。(口繪参照)

玉木正弘は忠と書き、倉橋直之助が臣と書き、馬島甫仙が報と書けば、藤野荒次郎が國と書き加へた。更に、妻木壽之進が罪と書き、國司仙吉が死と書き、岡田耕作が不と書き、敏三郎が悔と書いた。

かくして『忠臣報國罪死不悔』と出来上つたのであつた。正弘は松陰先生の從弟であり、敏三郎は弟であり、倉橋は親戚であり、馬島や國司や妻木は門人であつた。岡田耕作は正月元且十歳で入門して大いにほめられた神童である。

そして妹婿の小田村伊之助は『金剛山在野山中』と書き、松陰先生は『武夫の別れの筵、雪の梅』と一句を書き残してゐられる。側で見つてゐた母瀧子の心情はどうであつたらうか。如何にも武門の家の志士の別れにふさはしい小宴であつた。

かつて門人の渡邊萬藏翁が當時の情景を懷舊されつゝ話された一節があつた。

先生のお母さんが、みんな居並んで居た部屋の佛壇に燈明をともし、もう一度是非無事に歸させて頂きますと禮拜されたことをよく記憶してゐる。その時は皆シーンとして一言も發するものがなかつた。

涙に打ちしめる訣別の夜の有様が見えるやうである。

これより先き、母の瀧子は松陰先生が久々振りに野山獄より歸宅されたので非常に喜び、早速風呂をたきつけて入浴の用意を進めたが、先生の歸宅を傳へ聞いて門人や親戚どもの來訪が多く、そのため落ちついて話し合ふ暇もなかつた。瀧子は風呂場に行つて先生の背中を流しつゝ

「此度の江戸行は何んとなき氣遣はしい、寅次郎よ、今一度江戸から無事で歸つて氣嫌のよい顔を見せてお呉れ」と、しみじみ語つたのであつた。

松陰先生も覺えず親に先き立つ死出の不孝さよと斷腸の思ひを秘められつゝ

「母上様よ、それはいと易いことで御座います、必ず無事に歸つてお目にかゝりますから御心配御無用で御座ります。」

と、欣然答へられたものゝ、心の中には血涙がほとばしつてゐたことであらう。子を思ふ

母の情愛しみ／＼と身に浸み込んで、一層感慨の深きものがあつたことであらう。しかし先生にもまして永の獄中生活で、やつれ衰へて居られた先生の背中を流した母の瀧子の心情はどんなであつたらうか。而かもいまは愛児が江戸死獄への門出である。いかに氣魄に富んだ女丈夫でも、斷腸の血涙で胸が一ぱいになつたことであらう。

久し振りでの松陰先生の歸宅である。訪ね来る多くの親戚や門人等の應待に相當忙しかつたやうである。かうした二十四日の夜はだん／＼と更けて行つた。結ぶにひまなき東光寺の明けの鐘は先生の胸底に寂しく響いたことであらう。それにもまして母の瀧子の心中はどうであつたらうか。よもすがら眠りもやらで、愛児の越し方行く末を思ひ煩ひて、亂れがちな心に一夜を明したことであらう。

斯の母にして斯の兒あり

松陰先生江戸への護送

五月二十五日の朝。

梅雨はしと／＼と降りしきつてゐる。萩の街端づれの金谷天神の前で、見送つて來た門生達と前後の別を告げられて、松陰先生の櫓輿は東に去つて行く。

萩より山口に通ずる街道、大谷千坊師の廻はり角に涙松といふ老松がある。

萩より旅立つ人はこゝで萩城を見おさめとして惜別の涙を流し、旅よりかへるものは、萩城を望みて喜びの涙を催す、これより誰れいふとなく涙松と云へりと昔より言ひ傳へてゐる。

松陰先生はこの老松の下において

かへらじと思ひ定めし旅なれば

ひとしほぬるゝ涙松かな

と、その純眞な熱情と江戸死獄への決心とを示して、この涙松にかへらぬ涙を濺がれつゝ

斯の母にして斯の兒あり

も、たほ一念憂國の丹誠はいやが上にも燃え上つて

かけまくも君の國だに安かれば

身を捨つるこそ賤がほい(本意)なれ

五月雨のくもりに身をば埋むとも

君の御光月と晴れてよ

と、心に堅く誓ひつゝ國の前途に思ひを砕いてゐられる。あの熱血感激性の松陰先生は沿道諸所の風物に關し、その處、その人、その史實に對し、いつも無限の感慨と痛憤の熱情とをもやして、詩に歌に志を述べられてゐる。その京師通過に當つては

帶_レ涙孤囚有_レ執悲。 涙を帶ぶる(孤囚(松陰先生)執れあつてか悲まん

檻輿今日過_二京師_一。 檻輿・今日・京師を過ぐ

上林暑到清陰縮。 上林(御所のこと)暑は到つて・清陰は縮まり

大道霖餘蔓草滋。 大道霖餘・蔓草は滋る(この句は皇室の式微をいふ)

生死於_レ吾非_二大事_一。 生死・吾に於ては大事にあらず

乾坤無_レ慚是男兒。 乾坤無_レ慚は男兒、これ男兒

他年若遇_二源公問_一。 他年・若し源公(大原三位公、先生知遇をうけらる)の問ふに遇へば

爲報寅終不_レ負_レ知。 爲に報ぜよ・寅(松陰先生)終に知(遇)に負かずと

と、血泣一詩を賦して、皇室の御衰微を憂憤せられ、神奈川を過ぎては

金港泊_二夷艦_一。 金港(神奈川港)夷艦を泊す

三櫓七隻高。 三櫓七隻(三本マストの七隻)高し

輿窓思_二友人_一。 輿窓・故友(金子重輔)を思ふ

虜氛炎暑躁。 虜氛(外夷のこと)炎暑・躁し

と、かつて生死を契つて米艦をこの地に追ひかけられた金子重輔を思ひ出されつゝも、また外夷横暴を悲憤せられ、かうした檻輿の日々を過して、六月廿四日江戸長藩櫻田邸に着かれ、護送の人々に

歸るさにはつかりかねの聲きかば我が音信とおもひいでよ

と最後の別れを告げられて、藩邸の一室に囚居さるゝことになつたのである。

かくして七月八日に、町奉行石谷因幡守より、明日松陰先生を評定所に出頭させよとの命が櫻田藩邸に下つたので、九日の朝六ツ半(今の朝七時頃)評定所に出頭、一應取調べをうけられ

た後、云はゞいまの未決囚として傳馬町の牢獄に收容さるゝことになつたのである。

これよりが松陰先生最後の江戸獄生活であつて、至誠一念を以て幕吏に應接せられ、急迫せる内外の國勢を詳にして、赤心奉公の大義と君臣殉國の名分とを説破して、尊攘の魁たらんとされた最後の至誠憂國の活躍場面であつた。それだけ先生は幕吏應待に種々と思ひを練られたことであらう。それにまた門生達に對する最後の遺訓をも考へられたことであらう。或は同志連中に對する將來の謀策など細々思ひを回らされたことであらう。獄中とは云へ、心のゆるみもなければ閑時もなく、仲々忙しい様子であつた。

丁度八月四日、この日は松陰先生の思ひ出多い誕生日であつた。あの至孝な先生にはいまの不運な境遇に引き比べて、こし方行く末といろ／＼の思ひが浮んだことであらう。

許レ國之身敢願レ親。 國に許すの身・敢て親を願ふや

安然坐レ獄亦吾眞。 安然として獄に坐す・また吾が眞

忽逢ニ父母殉勞日。 忽ち父母殉勞の日に逢ふ

復被ニ西風愁ニ殺人。 復西風に人を愁殺せらる

と、一詩を賑してゐられる。思へば君國に殉ぜんと一旦心に許した身であれば、どうして親

などに心のひかれることがあらうか、従つて獄中獨坐靜かに君國の前途を憂ふるそれが自分の眞情である。しかし今日は八月四日であつてわが誕生日である。自分の生まれた時には定めて母上は生死の苦痛をなされ、父上は出産如何と心配されたことであらう。この父母殉勞の日に遭ひ感慨深きものがあるのに、而かも獄窓に吹き入る西風は憂思に耽ける吾を無情にも愁殺せしむる所であるとされたものであつて、獄中父母を思慕さるゝ切なる情懷が讀者の胸底を強く打ちぬくものがある。自分の生まれた時にあれ程母上に生死の苦しみを與へたこの松陰が、いま江戸獄中にあつて至誠以て幕吏を感格せしめ得ることも出來ず、御奉公どころか、かうした身の上であるかと思へば、實に相すまぬことであると、獄窓にもたれて涙にくれてゐらるゝ先生の姿には、何人も思はず涙を催さないものはあるまい。

親思ふ心にまさる親ごころ

かうした幾日かを経て、松陰先生もいよ／＼刻々に命の旦夕に迫り來れるを感ぜられ、十月二十日附で、左の永訣の書を認めて郷里の家人に送つてゐられたのである。

平生之學問淺薄にして至誠天地を感格する事出來不レ申、非常之變に立到り申候、嗚々御愁

斯の母にして斯の兒あり

傷も可被遊拜察仕候。

親思ふころにまさる親心

けふの音づれ何ときくらん

乍去、年去十一月六日差上置候書得と御覽被遊候はゞ、左まで御愁傷にも及不申と奉存候、尙又當五月出立之節、心事一々申上置候事に付、今更何も思殘候事無御座候。此度漢文にて相認候語諸友一書も御覽可被遊候、幕府正義は丸に御取用無之、夷狄は縦横自在に御府内を致致辱候へ共、神國未だ地に墜不申、上に聖天子あり下に忠魂義魄充々致候へば、天下之事も餘り御力御落無之様存奉願候、隨分御氣分御大切に被遊、御長壽を御保可被成候、兩北堂様（實母と養母）隨分御氣體御厭專一と奉存候、私被誅候共首までも葬吳候人もあれば、未だ天下の人々には棄られ不申と御一啖奉願候、兒玉、小田村、久坂の三妹へ五月に申置候事忘れぬ様御申聞奉願候、吳々も人を哀んよりは自ら勤むること肝要に候、私首は江戸に葬り家祭には私平生用候硯と十一月六日呈上仕候書とを神主と被成候様奉願候、硯は巳酉の七月か赤馬關廻浦の節買得せしなり、十年餘著述を助けたる功臣なり、松陰二十一回猛士とのみ御記し奉願候。

と、松陰先生は實に至誠の人であり、至忠至孝の人であつた。至誠の一念は日月を貫く勢を示して、すべてのものを至誠の二文字で焼き盡さんとするの感がある。殉國の一念は上に聖天子あり、下に忠魂義魄充々としてゐると、最後の痛憤の雄叫を響かせてゐられる。至孝の純情は天下の事も餘り御力落しなきやうにと却つて天下の衆目に血涙を催さしめてゐられる。然るに横暴非道なる幕吏は誦詐惡辣の限りを盡くして、遂に先生を評定所に呼び出し遮二無二に死罪を宣告したのであつた。噫。

思へば「平生の學問淺薄にして天地を感格する事も出来不申……御愁傷も可被遊拜察仕候」といふ一句こそ、まさに天地も定めし感格して熱涙を落すの心地がする。「親思ふ心にまさる親心けふの音づれ何ときくらん」と、松陰先生は自分の死を忘れて親に死の思を與へるかの思ひをしてドツと泣き崩れてゐられる。あゝ純情至孝の松陰先生。

子の死を父母に告ぐる程苦しい思ひはなかつたことであらう。それに可愛いわが子をして決死護國の躍動に三十年來指導薰育して來た父母の心情は松陰先生自らもよく知つてゐられる。それだけ一しほ心の苦しみが深かつたことであらう。

しかし憂國の父母と殉國の松陰先生である。

斯の母にして斯の兒あり

覺悟は平生より十分に定つてゐた。「神國未だ地に墜不_レ申……御氣分大切に被_レ遊御長壽を御保可_レ被_レ成候」と互ひに天下の事には更に力を落されぬ。しかしこの悲痛無殘なとおづれに力を落さぬ親があらうか。随分御大切に遊されたしと云はるゝわが子松陰先生の刑死を聞かれては長壽も何かと思はれたことであらう。かうした親子の情愛は、萩と江戸、三百里の雲山にもつれ合つたことであらう。

更にこの手紙の追而書を見れば、又々新しい涙が催して来る。兩北堂様と云つて、實母の瀧子や養母の久満やまた三人の妹等にまでも呼びかけて、先生は肉身のそれ／＼に一々細かに挨拶を述べてゐられる。そして一人を哀んよりは自ら勤むること肝要に御座候」と戒めてゐられる。自分の死をも顧みず、その身を捨て、妹等に婦道と孝道とを説いてゐられる。この哀れにも崇高なる松陰先生の大精神には誰人も泣されずにはゐられまい。まさにこれぞ敬すべく慕ふべく仰ぐべき眞個の殉忠殉孝殉國殉道の眞人と云ふべきであらう。

しかし思へば、これにもましてこの親思ふの一首である。先生は自分の死に直面せる心の苦しみ、情愛の結ばれ、生前死後のさまざまなる思ひの亂れをうち忘れて、愛兒を失ふ親の心の悲哀のいかばかりなるやと、親思ふ心にまさる親心と詠んでゐられるのである。その哀

哀切々たる心情は最早や筆にも言葉にも盡しがたいところであつて、著者も只々涙にくれて筆も進め得ないのである。

嗚呼、この血潮のしたゝる親心が母の瀧子の心であつた。蘇峰老先生の題字「斯母而有_二斯子_一」斯子而有_二斯母_一の一句、文字は尠ないが、千萬無限の深意が響いてゐる。別に新しい言葉でもない。しかし泣かすには讀まれない文句である。千古の金言が、この二句の中に嚴然と光を放つてゐる。味へば味ふ程、甘露の味が備つてゐる。これほど味ふべく尊ぶべき有難い言葉はな_く。

吉田松陰の母・瀧子の全生涯、眞生命もまさにこの題字の一句に意がつくされてゐる。

夢路に通ふ慈母の心

嗚呼悲哉松陰先生の最後

松陰先生は江戸在獄約四ヶ月の間、前後三回評定所の訊問を受けられ、遂に間部要撃事件で死刑の宣告を受けられたのであつた。

十月廿七日朝、評定所で宣告をうけられた松陰先生は、直に引き立てられて潜戸を出でられ、續いて朗々と聲高かに

吾、今爲レ國死。 吾いま國のために死す

死不レ負レ君親。 死して君親に負かず

悠悠々天地事。 悠悠々、天地の事

鑑照在二明神。 鑑照、明神に在り

と、辭世の一詩を吟誦された。松陰先生はいまや初一念たる殉國奉公の秋が來たと思はれたことであらう。至誠公明なる心事を滿天下の人心に訴ふべき秋が來たと考へられたことであ

らう。純潔丹心の大精神を悠悠々たる天地明神に捧げる秋が來たと觀念されたわけである。時には父母の心苦を煩はし、或は兄妹の憂慮を深め、或は主君への煩累を重ね、または門生等への痛嘆をも與へたが、これは畢竟尊攘の大義を樹てんとする至誠殉國の一念からであつた。三十年の生涯を顧みて少しもやましいところはない。いまとなつても敢て「死不レ負レ君親」やであり、尊皇護國の大精神が、よしや一時の物議を生じたとしても、死後必ずや「鑑照在二明神」である。これで自分の本望が達せられた。これで日頃の宿願成就が果せたわけである。皆人この松陰の最期をよく見届けて、一刻も早く尊皇護國の大義に殉じてくれよかしと、天を仰いで朗に高誦されたのであつた。

この憂國の雄叫びに幕吏護卒も暫し我を忘れて聞き入つてゐた。ふと氣がついて場所柄も辨へざる行動なりと大に狼狽して先生を駕籠に押し入れ「あゝ惜しき者なれど是非もなし」と、嘆息する同志の聲を後に、大勢の護卒は飛ぶが如くに評定所の門を出で傳馬町の獄へと急いだのであつた。

かくて十時過ぎに獄舎に歸へられ、廊下で袴紋付の上に荒縄をかけられ、愈々獄内の刑場に引き立て行かれたのである。この時松陰先生は同囚志士等への最後の告別として、かの留

魂録の始めに書き残された「身はたとひ武蔵の野邊に朽ぬとも留置まし大和魂一の歌と、この辭世の詩とを吟誦し終つて、各室の人々に目禮して立ち去られたのであつた。

かくして傳馬町獄内所定の刑場につかれたのであるが、その間悠然として服装を正し、さかして「鼻をかみ候はんとて靜かに用意して」と端坐瞑目の中に、斬罪役淺右衛門が振り上げし三尺にあまる大太刀に、ハツと秋水一閃、この純忠至誠の大偉人松陰先生は身首處を異にしてこの現世を去られたのであつた。(拙著「吉田松陰の最後」参照)

愛兒を思ふ瀧子の心情

丁度この頃郷里萩松本の實家にあつては、兄の梅太郎がふとしたことから熱病に罹り、續いて三女の艶子もまた病の床に伏してゐた。兩親は夜の目もろく／＼休まず、日夜打ちつゞく二人の愛兒の看護に疲れて、うと／＼と、うた／＼ねをしてゐられたのであつたが、ふと夢から醒めた父の百合之助は

「いまわたしは首を斬られた夢をみたが、誠によい心地であつた。」
するとまたその側にうつとりしてゐた母の瀧子も

「私はまた寅次郎が只今江戸から歸つた夢を見ましたが、非常によい血色でありました。」
と云ひつゝ互に顔を見合せ、どうも不思議なところのあるものである。江戸の寅次郎の身上に何か異變でもなければよいがなと共に氣遣ひ心配されたのであつた。

然るにその後日數経て、松陰先生刑死の報が來たので、日數を考へ合はすと丁度その日であつたのであつた。

嗚呼思へば先生が「親思ふ心にまさる親心けふのおとづれ何ときくらん」と詠まれた、その親思ひの心が傳馬町刑場から山河三百里を隔てた家郷の兩親に通ふたものであらう。しかしこれも愛兒思ひの母の瀧子の心が、また先生の心を親の枕邊に引きよせたものでもあらう。子を思ふ親の心は一つであつても、母は父よりも涙にもろい。父は胸中に萬斛の涙をかくしても嚴として愛兒に對す、母は血涙を袖に包みて愛兒の心情に泣き伏す、この悲報を得ては母の瀧子も定めし泣き崩れたことであらう。

十一月二十日には、江戸から飛脚が萩に着いた。

杉家の一族と共に村塾の門生等も松陰先生の殉難最後の様子を知り、また遺言及び留魂録をも届けられた。當時來島又兵衛が桂小五郎に宛て「松下塾の一統は不_レ及_レ申、有志の面々

愁傷不能筆紙盡候御推察可被下候」と云つてゐるのが、先生を知る秋中のすべての人々の心情であつたらう。

父の百合之助は、その遺書を父祖の靈前に供へ、怡然快心の一言を捧げて

「嗚呼、わが兒、一死國に報ず、眞にその平生に背かず。」

と、微笑して禮拜したのであつた。母の瀧子も定めし夫と列坐拜伏したことであらう。武門の習ひとは云へ、この親にしてこの子ありといふべきであらう。

一家一門の悲運

松陰先生刑死後の杉家の人々

松陰先生刑死後の杉家は陰雲に覆はれて物毎に涙の種となることが多かつたやうである。

それに愛兒寅次郎をして多難な君國に御奉公せしめんとした親の念願も、いまははかなき夢とはなつて、一層心寂しく力の落ちたことであらう。かうした場合に母の悲しみは父よりも一段と深いものである。

木枯寒き安政六年の冬も暮れて萬延元年の春となつた。樹々亭畔の梅花が漸くほころびんとする二月七日が松陰先生の百日祭であつた。久坂玄瑞を中心とする門生達は杉家に集つて心ばかりの小祭を催し、この日先生の前髪を團子巖の墓地に葬つたのであつた。母瀧子の思ひ出でも一しほ深かつたことであらう。愛兒を忍ぶ涙もまた新たなことであつたらう。然し愛兒が教へ子の門生達が集つて恩師思慕のかうした営みは、また寂しき瀧子の心をいたく慰めたことでもあつたらう。

かうした思ひ出深き悲しみの日々を送つてゐる中に、百合之助は松陰先生の監督不行届の故を以て逼塞に處せられ、五月四日には退隱を命ぜられ、兄の梅太郎が相續することになつた。武士の妻、武門の習ひ、かねて覺悟のこととは云ひじよう、瀧子は人知れず心を痛めたことであらう。夫を慰むる言葉もなく、妻としてどれほど同情したことであらうか。

續いて十一月には親戚の玉木文之進、久保清太郎、兒玉太兵衛等も親戚として監督不行届のかどを以て、これまた遠慮を申付けられたのであつた。わが子の不首尾とは云ひじよう、そも／＼寅次郎の夙志は尊攘大義への犠牲であり至誠殉國への蹉跌であつた。それにかく迄親戚の者共にまでも罪累を及ぼしたるかと思へば、百合之助も瀧子も定めて斷腸の苦しみがしたことであつたらう。

かうした鬱々陰暗な空気に包まれて文久元年も過ぎ、二年の十一月に至つて漸く松陰先生の大忠誠も時世の變轉と共に光明を翳してその罪を免ぜらるゝことになり、父の百合之助の懲罰退隱を解き兄の梅太郎は再び仕官することになつた。足掛け三年に亘る杉家の哀愁悲痛の陰雲も漸く晴れて、身も軽く心も豊かに年を越して一陽來復といふ文久三年の春を迎へ村塾の梅花もことしこそは馥郁として清香を放ち來つたのであつた。然しかうした晴朗な生

活もはかなき夢の間であつた。人生は禍福の交錯、なへる繩の如しであつて、好事魔多しといつた杉家の運命であつた。

時世は幾度か急轉變遷して國難は益々急迫して來た。愛兒寅次郎の教へ子等は恩師の大志を繼承して尊攘の旗高く復古倒幕の雄叫びに鼓を鳴して京洛の山河を震動せしめてゐた。遂に元治甲子の夏七月には、かつて松下村塾の總參謀であり、いまは洛外、天王山駐屯長軍の指揮者である女婿久坂玄瑞は、禁門の戦に鷹司邸内に於いて不運にも二十五歳を一期として戦傷自刃し、夏草の露と消え去つたのである。

廿歳を出たばかりの妻の文子が、やもめ暮しをする頼りない哀れにもいとしい姿を見るにつけては、母の瀧子の心は一しほ曇つたことであらう。時に「村塾第一流」と云はれた女婿玄瑞を思ひ出し、いまの愛娘文子と思ひ合せて人知れず熱い涙に袖をしぼつたことでもあらう。しかしあの氣丈夫な瀧子は、これも武門の習ひであると慰めいたはりつゝ文子の心を力強く引き立てゝやつたことであらう。

それにこの禁門の戦争に於ては、村塾時代にお風呂や御飯や洗濯などの世話までして、わが子のやうに育てゝ來た門人の入江九一や寺島忠三郎など多くの門生達が、愛兒松陰の大志

に心身を捧げつゝ女婿久坂の指揮で死を共にしたかと思へば、瀧子の心は吾が愛兒、吾が女婿の死と同じ悲しみに深く沈んだことであらう。これが武士の妻の宿命かと天をも仰いだことでもあらう。

禁門の變に敗れた長藩の運命は危急存亡の岐路に立つて生死の命は旦夕に迫つて來た。外には馬關に於ける外艦砲撃事件があり、内には征長の怒濤が四境に押し寄せて來た。そして藩内には急進的正義派と因循的俗論派とが抗争し、而かも遂に俗論黨の天下藩治となつて來たのである。

これがために正義派たる多くの憂國志士達も牢獄に投ぜられ、或はいたはしき刑死の慘害をも蒙るに至つたのである。

瀧子の尊き精神と不動の面影

かくして甕風吹き荒んだ元治甲子の年の暮れには、壽子の嫁いだ小田村伊之助の兄松島剛藏(贈正四位)は不運にもこの俗論黨のために野山獄で無惨にも斬罪に處せられ、續いて小田村も亦彼等の毒牙にかゝつて野山獄に繋がれるといふ實に悲痛慘憺たることばかりであつ

た。瀧子の心はどんなであつたらうか。狂はんばかりの思ひの亂れたことであつたらう。しかし雄々しくも武士の妻たる瀧子の誇りは世の人の嘲りも疑惑も心に留むることもなく、この悲痛哀愁の中にも力強く勇み立つて、かれを野山獄に見舞慰問してゐるのである。小田村はあまりの感激に

すてられてものゝ數にもあらぬ身をうとまぬ人は君ならで誰ぞ

と、瀧子の真心のいつくしみを拜謝しつゝ、かへり行く義母の瀧子の後姿を合掌したのであつた。それにまた慶應元年正月には玉木の男、彦助が俗論黨と闘つて二十五歳の若盛りをあたら花と散つて行つたのであつた。

一難去つて一難來り、一哀去つて一愁來り、一悲去つてまた一悲加はる。この年月の幾辛苦に對し、亂れがちなる心を取りなほしつゝ雄々しくも立ち働けるその艱難に練れたる母性瀧子の尊き精神とその不動の面影とが眼前に浮んで來る。

夫百合之助はその後一時もとの盜賊改方に復活はしてゐたが、小田村の漸く許されて出獄した頃よりは次第にその健康が弱つて來た。あの謹嚴な百合之助の氣質とし官を輕からしめてはならないといふので退官し、松本の里に靜に老後を養ひつゝ讀書三昧に殘世を樂んでゐ

たのであつた。しかし夏頃からはその好きな讀書も醫師にとめられて、病はだん／＼と重くなつて行つた。愈々臨終近くなつた時に、何か遺言でもないかと妻の瀧子が問ふと

「朝日が窓に映るのが見ゆるのは、今日は定めし天氣がよいからであらう、玉木を呼んでもらひたい、人の最も忘れてならぬことは、君と父との御恩である、藩主より賜はつた上下を玉木に着せて、藩主の御墓と父上の墓とに参詣さしてもらひたい、さすれば父上も地下に於て定めて悦ばれることであらう。」

と云ひ、また特に瀧子に向つて

「寅次郎は斬罪となつたけれどもその精神は朝廷に於いて必ず御覽になることであらう、私は決して悲しみもしなければ寅次郎を哀れとも思はない、我が家の子孫は充分先祖の氣風を繼いでお國のために勉強しなくてはならない。」

と云ひ残して、衣服を改め端坐のまゝ従容として瞑目したのである。時に慶應元年八月廿九日、六十二歳であつた。

瀧子は夫の病辱に就いて以來といふものは身も心も打ち忘れて、梅太郎夫妻と共に看護にあらむ限りの心を盡したのであるが衰弱は加はるのみであつた。木綿のかいまきでは流石に

衰へ行く身には重苦しいことであらうと思つて、袖のかいまきをこしらへて進めてみても

「身にあまる、もつたない、外(木綿をさす)のを着せよ。」

と云つて、百合之助は着なかつた程に身を持するに儉素なことは萬事この通りであつた。

それだけ瀧子の心はあせりもせば、またいじらしくも思つたことであらう。これと共に瀧子の一生の質實さも思ひやられる。

嗚呼夫百合之助は瀧子を殘して不歸の客となつた。貞淑な瀧子は老いの身のいたはしくも五十九歳で、寂しくも頼みすくなき寡婦生活に入つたのである。

思へば瀧子ほど家庭的に恵まれない境遇はなかつた。よしや胸中に萬斛の涙をやどすと云つても秋毫だも憂愁の色を外に現はすことはなかつた。如何に心中の亂れはあつても、どんな辛苦難事に遭遇しても、悠揚として迫らず心のゆとりを示して動するいろは見せなかつた。愛兒に先き立たれ、夫に死別し、女婿を失ひ、親戚縁者の不幸を目前にながめながらも、些々たる周章狼狽の様子もなく、起居動作、恰も平生に異ることなく、泰然自若不動の心を示してゐた。これぞまさに日本婦人の典型と云はないでなんとしよう。

雄々しき節婦烈女の龜鑑

前原一誠の亂と瀧子の態度

慶應元年と云へば、藩政府は俗論黨の掌中であつて、正義黨一派の追討を企てゐた最中である。そして長子の梅太郎は杉孫七郎、笠原半九郎等と共に鎮靜會なるものを組織して大いに正義派擁護のために力を致してゐた時であつた。續いて梅太郎は藩世子公の侍講ともなつてだん／＼と出世の道を進むのみであつた。愛兒寅次郎を失ひ、夫百合之助に別れた瀧子にも長子のかうした御奉公に、心潜に喜んでゐたことであらう。寡婦となつた瀧子は、長子梅太郎の國事奔走と立身出世を頼りにいた／＼しき心を慰めつゝ、ひたすら夫や愛兒松陰やまた國に斃れたその弟子達の冥福を祈るために深く佛門に歸依したのであつた。

山河の眺め靜かなる松本の里にあつて、朝な夕なに淨土三昧の佛光を仰ぐ外は、とかく國事のために外にありがちであつた梅太郎の子供達を愛撫しつゝ、一門故舊とも睦まじく交はつて留守居の餘生を心靜かに楽しんでゐたのであつた。處が計らずも明治九年十月萩に前原一

誠の殉國軍の騒動がおこつたのであつた。

前原は前名を佐世八十郎と云つて、夙に松下村塾に入つて松陰先生の尊攘殉國精神を力強く打ち込まれた愛弟子の一人であつた。松陰先生もかつて「八十は勇あり、智あり、誠實は人に過ぐ、その人物は完全であり、父母に事へては至孝である」とまで激賞されてゐる程の人物である。また玉木文之進の人格的教養をもうけて松門三俊傑とも云はれてゐた程であつた。夙に師松陰先生の勤皇護國の大精神を繼承して國事に盡瘁し、維新の際には各地に轉戦し殊に北越官軍の參謀となつて偉大なる武功を樹て、明治新政府の樹立と共に兵部大輔の重職に任ぜられたのであるが、軍備擴張論や征韓論などで廟議と意見が一致せず、西郷隆盛等と共に職を辭して「十年閑却す故山の花」と感慨を述べて巴城故山の花を再び見んものと辭任歸國の途に就いたのが明治三年の春であつた。

爾來所謂その故山の花たる巴城の地にあつて、時世の幾變遷に憂國の血涙を濺ぎつゝ、日夜悶々の情黙し難く、遂に師松陰先生の至誠殉國の大義心を奉ぜんと思悟し、殉國軍なるものを組織して萩に擧兵し、君側の姦を芟除せんと奮起したのが即ちこの萩の内亂であつた。これは遂に失敗に終つて、前原等一味は島根縣下宇龍港で捕へられ、同年十二月三日斬刑

に處せられたのである。

この萩の亂に際し、玉木文之進はかつての教へ兒であつた前原の動勢に、稍解し難い點があるといふので、機會ある毎に大義を説き名分を諭して暗にその輕舉を戒めてゐたのであるが、遂に前原の擧兵失敗に終つたので、「これ吾が平常教育の誤まてるが故である、いかにしてか地下の父老に相見ゆることが出来様か」と云つて、先祖の墓前で自刃したのであつた。嗚呼、教へ兒の罪を吾が教育の誤まてるなりとして、自己の死を以てこれを償ふ、實にこれ程崇高なる師たるもの儀表はあるまい、これほど尊き教育精神はあるまい。

瀧子としては夫なき後の只一つの力の頼みたる獨りの義弟文之進をもまた／＼失つたのであつた。瀧子はどんなに失望落膽したことであらうか。それにまた先きに松陰先生の後繼となつて吉田家にゆき第二の松陰たらしめんと、一家中の者共が希望の力を入れてゐた孫の小太郎(梅太郎の子)は、前原の行動は祖父松陰先生の壮志を繼承しての護國大義に殉ずるものであるとして前原黨に参加し、あの純情無垢な十九歳の青春をあたたら花と散らして討死したのであつた。瀧子の心情はどうであつたらうか。思ひ返せば過ぐる日、銃聲の聞えた朝、一寸杉家に立ちよつて、それとなく最後の別辭を残して出て行つた孫小太郎の後姿が目の前

にちらついて熱き涙に胸は裂けんばかりであつたらう。あの可愛い孫が血にまびれて斃れたかと思つた時には瀧子も定めし泣き崩れたことであらう。

そのみならず玉木家の相續人であり、梅太郎の長女、瀧子のためには孫の豊子の婿である玉木正誼(乃木將軍の弟)も參謀格で前原黨に参加し、萩の海岸越ヶ濱で追ひ手の兵と戦ひ遂に殞るゝに至つたのであつた。日頃からその憂國の至誠は兄(乃木將軍)にもまさる雄々しさであつて、杉家一門の譽であると皆々末を頼みにしてゐた養子正誼であつた。瀧子の心は重ね／＼亂れ曇つたことであらう。

亂に處して一絲亂さぬ沈着心

思へば靜かなりし孫相手の信仰生活も實につかの間であつた。有爲轉變は世の常なりとは云へ、すべてが夢のやうであつた。いまはまた數年前の様に杉家一門受難の時が來て、一大災難が振りかゝつて來たのである。前原の内亂に一家一族のかうした不幸悲運の上に、近よれば何時不慮の災禍罪累が及ぶかも知れないとあつて、日頃昵懇な近所の者さへも後難を恐れてよりつかないといふ状態であつた。殊に玉木文之進は前原黨の示唆者なりとの官の嫌疑で

厳しき家宅捜査までも受けなければならず、それに玉木の死骸の後始末も講じなければならぬといふ實に亂れに亂れた荊棘の中にあつて、瀧子一人の決斷措置に待たねばならぬ立場であつた。

常なれば唯一の相談相手である玉木がある。然るに玉木は自刃した、只頼りの一人である長子梅太郎は郡奉行として遠く隔てた玖珂の山代に勤めてゐて到底急場の間には合はない。近所の人々には相談どころか慰めの言葉一も交へくれないものはない。嵐の中の走馬燈のやうに暗黒界に再び沈んだあの憂悶の家庭、この紛々と亂れにみだれた家事、この心寂しい日々の中にあつて、氣丈夫な瀧子は平然と一絲亂さず沈着不動の心を示して、これ等の亂れ襲ひ來ることの數々の後始末を、すこしも誤まることなく處理して行つて、世の人の後指一つさされることなく立派に家政を切りぬけ整へ行つたのであつた。

思ひ返せば、瀧子も愛兒寅次郎の刑死の時未だ夫百合之助が元氣であつた。百合之助に死別した時には梅太郎も居れば玉木もゐて、瀧子も老いたりとは云へまだ五十九歳であつた。しかし明治九年には既に瀧子は七十一歳の高齢に達してゐた。そして一族の長老たる玉木文之進、愛孫の小太郎、それに末を頼みにしてゐた養子正誼など一時に三人の肉身を失つて

は、如何に氣丈夫な瀧子と云つても、老ひの骨身にこの世の悲哀がしみくくと徹したことであらう。

嗚呼思へば胸に萬斛の熱涙を吞むとは云へ、何んと氣丈夫な婦人であらう。普通の婦人なれば兎角哀痛愁傷の涙にくれて亂れがちであるものを、かうした幾度となく襲ひ重なり來る一家一族の災禍受難に當つて、毅然として愁傷の色もなく泰然として萬事を處理し、些々たる取り亂しもなく、綽々として餘裕を示しつゝ、立派に處理して行つた瀧子こそ實に非常時日本に於ける婦人の龜鑑典型と云はずしてなんとしよう。國家の危難に身を挺し率先殉じて行かんとする國士の家庭には、ともすればありがちな災禍難儀である。世の先達として革新運動に魁せんとするものゝ、母として妻として、やゝもすれば體驗し易き辛酸難苦である。この場合に於て、家庭の尊き母性として、夫の慰めたる妻として、いまこの瀧子の生涯を見れば、これ等のすべての苦しいばらの體驗を盡く集約してゐると云つてもよい。

現時の非常國難に際し、吾人の絶叫せんとするところは、よろしく現代婦人のすべてが「吉田松陰の母瀧子の心に復活せよ」といふことそれである。

静謐なる瀧子の晩年

宏大無邊の 聖恩愛兒の枯骨に及ぶ

亂雲去來し醒風慘雨の吹き荒んだ幕末維新といふ大修羅場の嵐も漸く晴れて、倒幕復古となつて明治新政府が愈々創始されるに至つたのである。しかし明治十年頃迄は未だ戦雲の飛翔もあつて神風連黨や佐賀、萩等の内亂ともなつたが、西南役を最後として明治維新の曙光はいよいよ麗はしき彩霞に包まれて中空にかゞやくやうになつて來た。

そして時世が治まれば治まるにつれて、時代が静まれば静まるにつれて、世人も過ぎし幕末維新の風雲を思ひ返へすやうになつて來た。従つて當時君國に殉じて一死奉公の赤誠を致した幾多の尊き勤皇烈士の英靈を追慕して、その人と爲りやその勳績を禮讃するやうになり、またかれ等の崇高なる血潮を分けた肉身の遺族や忘れ形見などに對する敬愛思慕の情やみ難きものゝあるやうになつて來たのは、まさに日本人としての本然の心であり傳統的な至情でもあつたらう。従つて松陰先生の如き、まさにその雄なるものゝ一人であつたと共に

「吉田松陰の母瀧子」も夙に世に顯はれてその主なるものゝ一人であつた。

それであるから前にも述べたやうに、遠くよりは書状をよせて寫眞を請ふ者さへもあつたやうな次第であり、明治十六年には三條公の手を経て長くも天覽に供せらるゝところとなり、また 皇后陛下の御慈み深き、あの品川彌二郎（品川彌二郎書翰参照）への御言葉を賜ふことにもなつたのであつた。殊に薄命不運の愛兒松陰先生は明治二十三年二月十一日憲法發布の盛典に當つては、正四位御贈位の御沙汰を拜せられて、宏大無邊の 聖恩枯骨に及び、母の瀧子は血泣九拜感涙に咽んだのであつた。

念佛唱名往生樂土の佛光に浴す

瀧子がかうした度毎に夫百合之助と愛兒寅次郎との靈前に燈明を捧げ、さながら生ける人にも言ふが如く、その特旨を報告し、わが身獨り生きながらへて、その鴻恩に浴すること、を拜謝しては相濟まないと云つて、先き立ちし夫のことや不遇なりし松陰先生のことどもを思ひ返へして曇り勝ちであつたと云はれてゐる。

明治廿三年の秋、松下村塾の故址を修理しまた小祠を建て、松陰先生の神靈を祭ることに

なつたその上棟式の時に、瀧子がかねてよりあまり肥満してゐて起居も不自由で、多くは褥を離れなかつたのであつたが、輿に乗つて式に参列し、ありし世の數々を偲びて喜びの涙に咽んだのであつた。式後開宴の際の如き、終始筵に列して盃を賓客に勸め、下々職人までにも盃を廻はし、満面喜悅の情に覆はれたと云はれてゐる。かうしたところにも瀧子の平常の至情心構へがよく現はれてゐる。晩年の瀧子は敬虔なる信仰生活に入り、嘗ては本願寺法主明如上人に参して直々に妙義を聴聞し、また島地默雷・大洲鐵然・赤松連城等諸師の教を受けて佛教の蘊蓄を極め、念佛唱名を以て往生樂土の佛光に浴しつゝ皇佛二恩の報恩感謝の日々を送つてゐたのであるが、明治二十三年八月二十三日偶々流行性感冒に罹り、同月二十九日八十四歳の長壽を保ち、念佛の聲と共に溘焉として涅槃の雲に入り長逝したのであつた。

日本母性として永遠に輝く精神

不思議にもこの八月二十九日、それは夫百合之助の祥月命日である。瀧子は夫百合之助の死んだその日に静かに瞑目して夫の側に歸つて行つたのである。幽冥界を隔つとは云へ、二人の心は常に親しく相通うて現世の契りの如く朝な夕なに心の宿のあつたことであらう。會

ては愛兒の靈に通ひ、今は夫の靈に結ぶ、實に瀧子の心靈ほど神祕にも崇高なる心靈力のあつたものはあるまい。この靈通ひ、これが神祕な日本人の血潮である。母の靈的血潮が子に通ひ、妻の靈が夫に通じ、國民の靈的至誠が大君に通じ、國家に徹す、こゝに神國日本の巍然たる雄姿の存することを忘れてはならない。

神祕な靈的瀧子の永眠七日の後 皇后陛下の思召を以て金壹百圓を賜はり瀧子はまたも身に餘る九重の恩寵に浴したのであつた。

また本願寺大谷法主夫人は瀧子の訃を聞き使僧を派して左の挽歌をよせて

實成院釋智覺乘蓮の身まかりければ

國のためつくしゝのみか傳へつるみのりの道はふみもたがへず

と、弔うてゐる。この乗蓮の謚號は大谷法主が嘗て瀧子に與へたものであつた。

嗚呼瀧子が杉家に入つて以來六十有四年間の生涯は世のあらゆる辛酸難苦をなめつくした所謂波瀾重疊の一生であつた。そしてその残生は信仰心によつてかゞやかしく靜かに沈み行つた生涯であつた。この艱苦と靜寂との間に練られた心の源泉の清水は汲めば汲むほど豊かなものであつた。その盡くるなく湧き出づる瀧子の清水は夫と日を同じうして死せるのみなら

す六人六様の子供に清く永へに流れてゐる。然かもあの忠誠殉國の吉田松陰といふ愛兒を通じて此の世に残した殉國大義の護國の大精神は昭和の現代にまでも淀みなく清く濺がれ流れてゐるのである。非常時昭和の婦人として母性としてこの永遠に濁りなき清水の心を汲まねばなるまい。

(終)

松陰歸于高洲邸。

福本椿水

南踏北蹤意ニ再逢。 情懷千萬淚沾胸。

春宵 夜眠難ノ就。 月落松村遠寺鐘。

松陰母子訣別。

鯉鱗橋上送君行。 籬畔飛花傷別情。

此去關東千里旅。 堪聽半夜杜鵑鳴。

昭和十六年七月二十五日 印刷

吉田松陰の母

昭和十六年八月五日 第一刷發行

定價金一圓八十錢

著者 福本 義亮

發行者 東京市神田區錦町一丁目五番地

小川 菊松

東京市板橋區練馬南町一ノ三五三二

印刷者 小林 浩齊

東京市神田區錦町一丁目五番地

發行所 株式會社 誠文堂新光社

(會員番號一一四五〇六)
電話神田二二六―二二九番
振替東京六二九四番

東京市神田區淡路二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社

るす資に養修民國

書の國憂生先本福

吉田松陰の母

新體制下日本女性必讀の聖典 吉田松陰研究家福本先生が心魂を傾けて描ける殉國士松陰先生の母杉瀧子の全生涯。維新同天の志士が如何なる母の手で育てられたか。偉人を生んだ母の生涯には涙ぐまじき刻苦努力があつた。著者は新たな資料のもとに熱意を以て執筆してゐる。現下の日本女性に必讀を奨める書。

福本義亮著

定價 一圓八十錢 送料 二十一錢

吉田松陰の殉國教育

吉田松陰先生はかの著名な松下村塾に於て至誠を以て門生に臨み大義名分の活教育を施された。本書はその殉國教育を詳細に説かれたもの。一億國民の修養書。

定價 六・〇〇 送料 三三

結細孫子評話

孫子は昔から兵書として知られるが、武人のみならず、國家の各方面に活躍する人々に必讀の書。本書は正に活きた註釋ともいふべきもの。好評噴々！

定價 三・五〇 送料 三三

盡忠吉田松陰の最後

盡忠殉國、烈々熱火の如き吉田松陰先生の本國民はひとしく學ばねばならぬ。本書は松陰研究家として知らる著者の傑著。

定價 三・八〇 送料 二一

訓吉田松陰殉國詩歌集

本書は吉田松陰先生が燃ゆるが如き熱意と愛國至情を以て綴られた詩歌の集大成で、読み方は勿論、時代を説き、出典を明らかにし訓註として完全無比。

定價 六・五〇 送料 三三

るす倒壓を界版出

著快三の評好大

動亂歐洲を衝く

生々しい動亂ヨーロッパの近状を語る 著者は第一次歐洲大戰にロシアの觀戰武官として滯歐六ケ年、今次戰亂にも前後四ケ年ドイツを中心として軍事専門家の立場から活躍す。歐洲の動亂を解剖するに著者の如き適任者はない。その周到にして鋭敏なる觀察は私共の肺腑を抉つて餘りある。果然大好評。

陸軍少將

長谷部照倍著

定價 一圓八十錢 送料 二十一錢

鐵か肉か

ノモンハン鐵肉戰の真相を描く 滿ソ國境ノモンハンに於ける機械と肉弾の相搏つ凄慘壯絶の光景！ノモンハン戰の真相を小説體をもつて描き、絶大の好評を博しつゝある軍事小説。發賣以來既に三百五十版を重ね、なほも註文殺到の驚くべき賣れ行きを示しつゝある近來の快著！日活で劃期的映畫化着手！

山中峯太郎著

定價 一圓五十錢 送料 二十一錢

支那辺境物語

日本人の始めて踏破した探検秘録集 本書は矢島保次郎・横田藤郎・織屯・山縣初男・村田孜郎の五氏がかつて邊境に單身乗り込み、血の滲むやうな苦節を重ねて探つた貴重なる探検記録である。涙の滲むやうな感激と美しいローマンスに溢れた絶好の讀物！未開の支那邊境生活を描いて興味津々、大好評！

讀賣新聞社編

定價 一圓五十錢 送料 二十一錢

全國國民必備之讀
本社之良書

空地野菜の作り方

刻下の急務たる食糧増産の目標を以て野菜栽培の基礎知識を普及する苦心の著述！日常生活に於ける物資の充實を圖らんとする都會人士必讀の書！挿入寫眞二百餘箇！

實際調査主幹
石井勇 義著 送料 二十一錢
現下空地利用の叫びは各地に起つてゐるが、本書は空地利用野菜栽培の指導を目的とし多年の經驗を有する著者が實際の見聞知識を加へて平易に記述したもの。殆ど毎頁に挿畫寫眞を入れ、如何なる初心者にも野菜栽培の實際を會得せしめる好著。

隣組と常會

大政翼賛の基礎は隣組と常會だ！
本書は隣組の組織とその運営する常會の二方面に亘り必要事項を平易に講述したもの！好評噴々！

企畫院調査官
鈴木嘉一著 送料 二十一錢
今や常會は日本内地は固より滿鮮等にも普く行はれんとしてゐる。本書は常會とはどんなものか、常會を開いて行くにはどうすればよいか等の具體問題をいちいち實例を擧げて詳しく説明したもの。職場に學校に家庭に役場に必備の書だ。

水戸學研究の權威
高須博士の快心之三著

大日本史に尊皇精神

大日本史研究の精華・著者の博士論文
外史の扮本となり明治維新の最大原動力となつた極めて有名な書である。しかしこれに就て學的研究を行つたものは本書以外にない。本書は「大日本史」に就いて學的研究を行つた著者の博士論文。東朝・東日が筆を揃へて推稱する名著！

文學博士
高須芳次 郎著 送料 二十一錢
定價 三圓五十錢

水戸學徒列傳

水戸學入門書として近來の好著
水戸學は義公・烈公を始めとして、安積澹泊・藤田幽谷・藤田東湖・會澤正志齋等を生み、維新回天の根幹をなした水戸學徒百數十名のかくれたる功績と事業を明かにしたものである。卷末には水戸學研究に必要な諸部門を特に設けて讀者の便をはかる。時局柄萬民必讀の書。

文學博士
高須芳次 郎著 送料 二十一錢
定價 二圓

藤田東湖傳

至誠の偉材東湖の全生涯を活寫する名著
藤田東湖の傳記は数多いが、本書は最も平易に且つ正確に傳へたものである。著者は東湖研究のため水戸市の後援のもとに私財を投じ約一ケ年に亘つて資料を集め、新研究のもとに書き下したもので、偉人東湖を彷彿させる。本書は實に生きた東湖傳といふべきもの。

文學博士
高須芳次 郎著 送料 二十一錢
定價 二圓五十錢

時局に對する

最新刊の三大名著

資源戦争

ワルター・パール著 定價 一圓八十錢
岩田孝三譯 送料 二十一錢

列強の資源獲得の全貌を明かにする時局必讀書 本書は重要な列國資源に就て各部門に分ちそれぞれの機能・所在地・保有高・需給關係・輸出入關係等を科學的に精密に比較研究せるもの。原著者はミュンヘン大學の教授にてドイツで噴々の好評を博せる原著。譯文亦流麗暢達。口繪寫眞十六葉。大好評！

支那西康事情

楊仲華著 定價 一圓五十錢
村田孜郎譯 送料 二十一錢

支那邊境西康を知る唯一の案内書 豊富なる資源と怪奇なる習俗を持ち今や援蔣ルートの起點となりつゝある秘境西康省の地理・歴史・政治・産業・人情風俗の全貌を語る。原著者楊仲華は西康に生れ、北京中央政治學校に學び、卒業後西康に歸つて同省の地理を研究し本書を著したもの。村田氏苦心の好譯！

ソ聯の經濟

東朝論說員 定價 二圓五十錢
嘉治隆一譯 送料 二十一錢

ソ聯の經濟事情を根本的に研究せる時局參考書 巨大なる領土と豊富なる資源を包容するソ聯の動きは世界の注目の標的となつてゐる。本書はソ聯が幾度か試みた經濟計畫の再檢討にその鋭いメスを集中する一方、ソ聯の經濟に就て古代より現代に至る迄の進展過程を手際よく纏めたもの。著者はソ聯研究の權威。

919
106

終

